五輪の収穫 パリへの糧に

TOKYO2020終わって 7選手決意新た

3種目で日本新
齋藤選手 力泳及ばず

多くのドラマが生まれた東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会。本学からも7選手が出場し、野球で岩崎優選手（平成26年21世紀アジア学部卒）が金メダルを獲得したほか、パラ水泳では工学研究科修士課程1年の齋藤元希選手が日本新を更新する泳ぎを見せるなど、選手らの奮闘ぶりはコロナ禍のうっ屈した世界に勇気と感動を与えてくれた。

「悔しさも」報告

9月21日には、出場7選手のうち、新体操・個人総合の喜田純鈴選手（21ア3年）と大岩千未来選手（理工2年）、パラ水泳の齋藤選手、新体操・団体総合の松原梨恵選手に交代した新体操・団体総合の横田葵子選手（令和2年21世紀アジア学部卒）と各指導者らが世田谷キャンパスを訪れ、大澤英雄理事長、佐藤圭一学長をはじめとする本学役員らに結果を報告した。

5種目に出場し、得意の100㍍背泳ぎで8位、混合リレーでは5位と健闘した齋藤選手は、3種目で日本新記録、混合リレーでアジア新記録を樹立した。齋藤選手は力泳を振り返り「記録更新はできたが、世界との差を感じたレースだった。今回の経験を糧にパリ大会につなげたい」とさらなる飛躍を誓った。

予選11位と19位で本戦への出場を逃した喜田選手と大岩選手はそろって「緊張から本来の力を出せなかった」と悔しさをにじませ、本戦出場まであと一歩に迫った喜田選手は「出場までの過程で得た経験が一番の収穫だった」と語り、大岩選手は、「感動を届けられる演技をするためにもより一層励んでいきたい」と力強く先を見据えた。

大澤理事長と佐藤学長は「コロナ下での調整という過酷な状況下にもかかわらず、堂々としたパフォーマンスだった」と努力をねぎらい、「人々の心に感動を与えた大会に出場されたことは本学にとっても大きな誇り」と選手らの健闘をたたえた。

報告会に参加した6選手。左から松原選手、大岩選手、喜田選手、横田選手、齋藤選手、小南選手＝本学出身のオリンピアン・パラリンピアンを紹介する「国士舘スポーツの殿堂」前で

躍動！ 国士舘オリンピアン・パラリンピアン

パラリンピック水泳
齋藤　元希選手
（工学研究科修士課程１年）

（アフロ提供）

新体操・個人総合
大岩　千未来選手
（理工２年）

（アフロ提供）

新体操・個人総合
喜田　純鈴選手
（21ア３年）

（産経新聞社提供）

競技成績

本学関係選手の結果は次のとおり。

◇在学生

【新体操】
●喜田純鈴　個人総合11位（予選敗退）
●大岩千未来　個人総合19位（予選敗退）

【パラ水泳】
●齋藤元希　男子100㍍バタフライS13　10位（予選敗退）、男子400㍍自由形S13　9位（予選敗退）、200㍍個人メドレーSM13　9位（予選敗退）、混合4×100㍍49ポイント　9位（予選敗退）

【サッカー女子】
●清水梨紗　ベスト8

【野球】
●岩崎優　優勝

【新体操】
●松原梨恵　団体総合8位

【陸上競技】
●小南拓人　男子やり投　予選グループB　8位

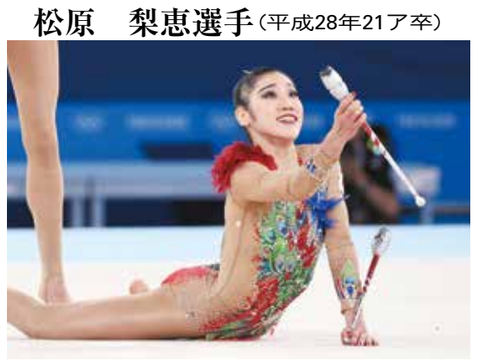
野球
岩崎　優選手（平成26年21ア卒）

（Getty Images提供）

陸上競技　男子やり投
小南　拓人選手（平成30年体育卒）

（アフロ提供）

新体操・団体総合
松原　梨恵選手（平成28年21ア卒）



（アフロ提供）

サッカー女子
清水　梨紗選手（令和元年21ア卒）

（アフロ提供）

五輪「野球」審判で出場

「言葉の壁は世界共通のルールで超えられることを実感した」と森さん（中央）。東京オリンピックの野球競技の会場となった横浜スタジアムで審判団と

卒業生奮闘 この人 ㉞

プロ野球審判員
森　健次郎さん（昭和61年政経学部二部卒）

平成29年に通算2000試合を達成するなど34年にわたり数々の名勝負に携わってきた日本プロ野球機構（NPB）審判員の森健次郎さん（昭和57年国士舘高校、同61年政経学部二部卒）。東京オリンピックで審判員としてはプロ野球界から初の出場を果たし、5試合で審判を務めた。在学中の思い出や知られざる審判員の仕事を伺った。

◇

森さんは試合開始の2時間前には球場に入り、ウォーミングアップと身支度を念入りに行う。スパイクをピカピカに磨くのは、審判員の誇りと姿勢を示すこだわりの日課だ。審判団としても大切な準備がある。滑りの原因となる硬球の表面についた蝋（ろう）を専用の砂で揉んで取り除く作業だ。毎試合、平均120個の試合球が審判員室に持ち込まれるという。

3年前に導入のリクエスト制度について「ビデオ判定は時代のすう勢だが、それでも人間がやる誠実さと技術向上へのたゆみない努力で、「選手に尊敬される存在であり たい」と力を込める。

8月3日のドミニカーイスラエル戦で二塁塁審を務める森さん＝Getty Images提供

四徳目の意義 社会で実感

◆鍛えられた野球部時代

国士舘高校入学と同時に野球部に入部。寮生活と「戸次義一監督（当時）からの硬軟織り交ぜた指導で」心身が鍛えられ、マネージャー兼コーチとして部を支えた。大学進学以降は東京都高校野球連盟、東都大学野球連盟の審判員として力をつけた。プロ野球の審判員を招いた講習で、「そのかっこよさに惹かれて」プロを目指す決心がついた。

◆狭き門くぐり「金字塔」

昭和63年、NPBの前身のセントラル・リーグの採用試験では、700人中、合格者は森さんを含む3人の狭き門だった。NPB登録の審判員は現在58人で、森さんはシニアクルーチーフとして名実ともに球界を代表する存在だ。

シーズン終了後は研修や後進の育成のほか、来期に備えて各球団のキャンプ地を回りブルペンで「目慣らし」をする。完全オフといえるのは、1月の約2週間という。

常に緊張を強いられる審判員の仕事。長く続ける秘訣は、判定に疑念を持たれることがあっても、意図的に気持ちを切り替えることだという。

そんな森さんだが、判定で苦しんだ経験を「翌日の新聞は全部買い占めたいくらい」と笑って振り返る。

東京オリンピックでは重責を果たし〝侍ジャパン〟の金メダルとともに、その金字塔を打ち立てた日本審判団。森さんはこの経験を継承する使命を強く感じている。

◆身に染みた四徳目

本学の教育理念の四徳目「誠意・勤労・見識・気魄」は社会に出てから身に染みたといい、「人の生き方のすべてが凝縮されている」と今も大切にする。母校の後輩たちには「失敗を恐れずに挑戦する心をもって」とエールを送る。「何より生涯の友との出会いを大切にしてほしいですね」。

※全文は大学ホームページで公開しています。

卒業生 岩崎投手「金」
静岡県民栄誉賞も決定

本学の卒業生・岩崎優投手ら野球日本代表は、決勝でアメリカを破り、野球種目が正式競技となって初めての金メダルを獲得した。

岩崎投手は、貴重なサウスポーとしてチームのブルペンを支え、計3試合に登板。決勝戦では1点をリードして迎えた八回、無死一塁とランナーを背負った場面でマウンドに上がり、最初の打者を三振に切って取るなど3人を完璧に抑え、試合を左右する局面で相手に流れを与えない見事な活躍をみせた。

岩崎投手は、出身地である静岡県から「県民栄誉賞」を贈られることが決まっている。

授業の現場から vol.32

斉木秀憲研究室

修士論文の中間発表会で。前列左から２人目が永木さん、３人目が斉木教授

法学研究科修士課程2年
永木　信男

法学研究科の斉木秀憲研究室では、租税法および税務訴訟の研究を通じて租税正義の実現について検証することをテーマとしています。授業では、租税法を体系的、理論的に理解するとともに、実務で生かすことのできる租税法を学んでいます。

その集大成として、修士論文を作成し国税審議会の認定を受けることで、税理士試験の税法科目の免除を受けることができます。社会人の方が多く、年齢層が幅広いのが斉木研究室の特徴です。働きながら学ぶことは容易ではありませんが、同じ志をもった仲間にいつも助けられています。

1年次では、講義科目と演習科目があります。講義科目では、判例研究を通して租税法の趣旨や考え方を学びます。講義は意見を出し合い議論するので活気にあふれています。演習科目では、一人一人判例を決めて評釈を行い発表します。発表では、他の大学院生からの質問にも答えるので、資料の収集および検討の事前準備に時間がかかり、発表もぎこちなく、今では懐かしい想い出の一つです。

2年次の現在は、修士論文に取り組んでおり、先生の熱意あるご指導にいつも感謝しています。

修了後は目標としていた税理士として活動していく予定ですが、やっとスタートラインに立ったに過ぎません。しかしながら、法学研究科では卒業生の研究会があり、相談や勉強会が開催されています。このように、修了後もこの学び舎に繋がっていけることもこの研究科の大きな特徴といえます。斉木研究室は、学びと助け合うことの大切さを教えてくれました。

古坂正人ゼミ

前列左から３人目が竹田さん、４人目が古坂准教授

政経学部3年
竹田　夢輝哉

私が所属する政治行政学科の古坂正人ゼミでは、社会課題を発見して、大学と行政などが連携して解決策を考える「社会連携論」を実践的に学んでいます。

具体的には、防災やまちづくり、教育や都市農業などの公共政策について、現地調査をもとに自治体や企業、大学や地域住民などさまざまな観点から当事者として何ができるかを考えています。

実際に、平成30年度から古坂ゼミでは、本学と包括連携協定を締結している埼玉県八潮市が開催する、社会課題の解決策を提言する「政策プレゼン大会」に参加してきました。今年度は「子どもと教育」が大会テーマとなっており、コロナ禍で運動機会が減少する子どもたちについて、基礎体力の低下を防ぐ仕掛けや仕組みを調査しています。ゼミ生同士で解決策を議論することで企画構想力が高められ、発表の練習や準備を一緒にすることで、メンバーの結束力が強くなり、人前で話すことに自信が持てるようになりました。

古坂ゼミでは、こうしたゼミ生同士の「ヨコ」のつながりだけでなく、卒業生とオンライン交流会を開催する、ボランティアとして地域の祭りに参加するなど、先輩・後輩との「タテ」の関係や、異年齢で構成される地域社会との「ナナメ」のネットワークづくりを大切にしています。

ゼミの活動を通して公共政策に携わることは学生時代になかなかできない貴重な経験です。コロナ下でもICTを活用することで、人間関係を発展させ、深い学びの機会を創出させることができると思います。

就活支援

対面で合同企業説明会

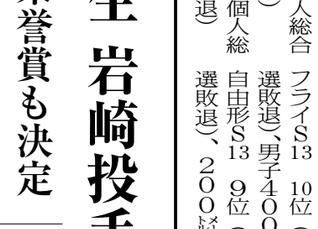
２日間で10社の説明会が実施された

9月21・22日の両日、学部4年生・修士2年生を対象とした学内合同企業説明会「就活！HOT SPACE」が、世田谷キャンパス8号館1階の多目的ラウンジで開催された。

本学学生に対し採用意欲の強い企業など、2日間で計10社のブースが設けられる中、今回は延べ88人と例年の同時期に比べて多くの学生が参加した。メモをとりながら企業担当者の話に耳を傾け、積極的に複数のブースを回るなど熱心に参加しており、コロナ下にあっても就職活動への関心の高さがうかがえた。

2日間で複数の企業の説明を聞いたという政経学部と法学部4年の女子学生は「最近はオンラインが多いので、直接話が聞ける機会は貴重」「就活サイトでは目に留められなかった企業も、話を聞くことで興味がわき、選択肢が広がった」と話し、緊張感の中にも笑顔を見せていた。

企業担当者が講師に
就職講座



本学キャリア形成支援センターは、学部3年生・修士1年生を対象に、就職講座を開講している。

9月28日に世田谷キャンパス多目的ホールで行われた第1回の講座では、「人事が語る採用本音トーク」と題し積水ハウス株式会社と小田急電鉄株式会社の人事担当者が登壇。参加した約90人の学生らは、コロナがもたらした採用手法や働き方の変化、求める人材や就職活動の始め方などについて話を聞いた（写真）。

積水ハウス株式会社の和田泰英氏は、就職活動を始める際に「社会に出た時の自分の価値観を順位づけ、その価値観に合う会社を探すことが大切」と述べ、コロナ下の就職活動に不安を抱く学生にアドバイスを送った。

本講座は世田谷・多摩キャンパスで12月まで開講する予定で、受講できなかった場合は後日オンラインで動画視聴が可能。同センターは今後も情報提供をこまめに行い、各イベントへの参加を呼びかける。

教員採用試験 面接練習会

「スキルアップを実感」

教職課程運営センター主催の教員採用試験面接練習・研修会が7月24日と8月7日、世田谷キャンパス34号館の各教室で実施され、教員採用試験を目前に控えた4年生を中心に延べ約80人が参加した（写真）。

練習会では各班に分かれ、教職支援アドバイザーの各講師指導のもと、個人面接や模擬授業など本番を見据えた実践的な練習を重ねた。採用試験で面接官の経験を持つ講師らは、あいさつの仕方や身だしなみなどを再確認したほか、各自治体の試験傾向を踏まえ具体的なアドバイスを送った。

参加した学生は「試験本番を前に課題を再確認できた」「参加するたびに面接時の受け答えなど自身のスキルアップを実感している」などと成果を口にし、「教師になる夢をかなえるためにも残りの期間を悔いなく過ごしたい」と意気込んだ。